

「2018年度 分科会報告」

I はじめに

2018年11月3日、4日の2日間にわたって開催された家庭科教育分科会では、計3本のレポートを元に議論を深めた。始めに基調提案として共同研究者の内藤しをり氏から前年度の分科会の報告があった。その後、参加者の近況報告を兼ねての自己紹介を行った。今年度は4月から職場が変わった参加者が多く、職場や生徒の様子について報告しあうとともに、地域や学校によって家庭科指導にかかわる施設設備や教員体制などが全く違うということから、教育条件整備についても議論が及んだ。

II. レポート発表

1. ESDの視点での学習指導 「フードデザイン」一人で作る実習～途中経過

北海道斜里高校 内藤 しをり

総合学科が今年度1年生より1間口となった高校での実践報告である。ESDとは、教育課程の研究指定校事業であり、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身につける」ために、①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度を意識し、その視点からの学習指導を目指すものとのことである。

報告者は、この研究指定が、どのような背景の中で進められてきたものかが分からない中で、学校の取り組みを求められ、授業づくりを考える中で、総合選択「フードデザイン」の中で、一人で調理実習をするという授業に取り組んだ。

「青年期の栄養を考えたお弁当のおかずをつくり、弁当箱に色取りよく詰める」という実習で、献立は①ピーマン、ウィンナー炒め、②チーズ入り卵焼き、③ちくわきゅうり、④プチトマトである。

生徒は、「今までにない一人での活動だったので、少し不安だったけど意外と早くできました。」「今日初めて自分のお弁当の中身を作りました。毎日学校はお弁当だけ自分では作ったことがないので、親のありがたみと大変さがわかりました。」「最初はめっちゃ不安だったけど上手く作れたし、一人で頑張って作ったのでよかった。家でも一人で作ってみようと思いました。」と感想を書いている。

報告者は「生徒の主体性を大事にしながらも、調理実習は生徒に何ができるようになるための手段なのか、ということも真摯に考え、やって終わりとならないようにしていくべき」ことを今後の課題としている。

⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度と、「態度」をことさらに強調することは、国や学校が考え方や行動を縛ることがどうかという疑問点があるものの、①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力といった力は、家庭科の授業の中で、これまでも大切にし、これからも育成していく力である。一つ一つの体験から生徒たちが何を学び、それによって彼らの現在と未来の生活がどう変わっていくのかを想像した授業づくりが重要だと考えさせられる実践であった。

## 2. 地域の人と作るフードデザインの授業について

北海道滝川西高等学校 福間 あゆみ

報告者は、「フードデザイン」では、調理実習を通して技能や技術を高めることも重要であるが、食材を知ることも大切なことであると考え、8年前から普通科生徒の「フードデザイン」で野菜作りを取り入れ実践してきた。卒業後にほとんどの生徒が進学をして地元を離れることから、卒業前に地元で生産されるものや農産物に興味を持って欲しいと考えている。教員の減により、この選択科目は次年度からは開設されないため、今年度が最後となった取り組みの報告である。

授業計画は

(1) ねらい 滝川市の地域性を活かした農業体験を通じて、自然の恵みに感謝する気持ちや生産者の苦労や喜びに触れることによって「食」と「農」のつながりの実感を促し、食の自己管理能力を高めることを目的として実践する。

(2) 対象 3年生普通科フードデザイン選択者21名

(3) 期間 平成30年5月～平成31年1月

(4) 場所 宮本さんの畑

(5) 移動手段 徒歩

(6) 協力者 滝川おもしろ食育塾の皆さん、農場主 宮本さん

(7) 栽培 枝豆、じゃがいも、さつまいも、落花生、かぼちゃ

実施内容としては、農業体験、加工体験、出前授業などである。

今年度の授業では、農家の方から野菜の知識や植え方について指導していただいた。生徒は、「やはり、農業は大変だと改めて思いました。マルチを土にかぶせるのもなかなかうまくできませんでした。ずっとしゃがんでやわらかい土の上にいるので、足も痛かったです。でも、自分たちが植えた野菜を収穫するときにすごく楽しみです。」と感想を述べている。

出前授業で野菜の特徴や育て方について学んだ生徒は、「特に一番興味を持ったことは、植物は自分で栄養を作り自分で生きていくという生命力のすごさです。うごけない中で自分の栄養を手に入れているのは植物ならではの働きであり、私たちにはできないことなので、植物を大切にしていけることが必要と感じました。」と感想を述べている。

3回の草取り作業も体験させ、収穫の時期を迎える。11月には協力してくれた地域の方と生徒が考えた献立を作り、大収穫祭を行った。

報告者はまとめとして、出前授業を行ってくれた伊藤さんが「滝川になくてはならない農業をもっと知ってもらうためには食を考え、知ることが大切である」、「生徒たちが自ら考え地域のために活動する場所を作ってあげることが大切である」と語ってくれたことがこの授業の基盤になっていると述べている。

学校の規模が小さくなる中で、教員定数が削減され、選択科目が減らされることにより、こうした実践を行う機会がなくなることが残念である。北海道の広大な地域性をふまえた教育条件整備の必要性を改めて考えさせられる。

今年度異動となった私自身が、これまでやってきた授業の「評価」と「考査」の工夫についてまとめたものと、生徒との関わりについてのレポートを報告させていただいた。

教員になって間もない頃、「家庭科の先生には、実習を通してつくられる生徒との特別で不思議な関係がある」と言っていた先輩がいたが、それを今は実感できるようになった。

提出物は、できるだけ基準をはっきりさせることや「評価に関わる重要なもの」ということを繰り返し指示し、放課後に一緒に行くなどして全員が出せるように指導してきた。「全員提出」は、自分自身に課した課題でもあり、生徒理解や人間関係づくりにも有効な時間であると考えている。

「フードデザイン」では、実技テストを行っているが、練習を何回もさせて、できるだけ失敗なく作れるようになってから、テストに入るよう指導をしている。できないことを生徒のせいにならず、「出来ないことができるようになることが大事、どうやったらうまくできるかを考えて教える、それが指導だ」と考えている。生徒にも頑張るところはどこなのかを示すこと重要だと考えている。

「考査」にも持ち込みの資料を活用したり、事前に練習した計算問題を入れる、ボタン付けの実技など実際に努力してできるようになったことを組み込むような工夫もしてきている。

現在の学校では、「食」についてのレポートを作成してもらった。生徒のものの考え方や生活の状況を想像することができた。

#### Ⅲ. まとめ

2日間の討議の中では、生徒が選択した科目の人数に上限があって抽選となるような実態もあり、本来学びたいと思っている授業を受けられなくなっている状況が報告された。また、初任者や期限付教諭が多い地方の学校では、家庭科実習室や設備の管理がわからない教員が増えているという指摘や、学校内で家庭科の授業内容があまり理解されていないのではないかという疑問も出され、教育の機会均等を保障する観点から条件整備を求めることや、私たちがすぐにできることとして、情報交換や情報発信の必要性についても確認できた。

上から降りてくるものに消化不良を起こしている学校現場の実態や複雑な家庭環境の中で苦しんでいる子どもたちの様子が語られたが、参加者から、「退職して思うのは、目の前に生徒がいて教えられる、教育の仕事は素晴らしい。大変なこともあるけれど、先生たちには頑張ると言いたい」との言葉をいただいた。本研究集会の講演で、梅原先生から「教育実践に、自主性、柔軟性、創造性、専門職性のうねりを巻き起こそう」、「教育の場に、人間らしい息吹を吹き込もう」など、私たちの目指す教育実践の方向性が示された。また来年も実践を持ち寄り、家庭科の学びをどうつくるか、討議していきたい。